

西住さんちの今日のごはん

アバラセツちゃん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

熊本県熊本市。商店街。

この物語は、とあるご家庭と友人たちのなんでもない日常の一幕。戦闘シーンなんてない。

目次

一話	寄せ鍋	1
二話	カレーライス	6
三話	ハンバーグ	13
四話	流しそうめん	19

## 一話 寄せ鍋

「うわ、降ってきたよ」

天気予報で雪が降ると知ってはいたが、やはり実際に帰り途中に降られると精神的にクルものがある。

せめて家に着いてから降ってくれよ、なんて思うのは決して俺だけではないはず。小さい頃は雪は降るだけで嬉しかったし、それこそ外に出て遊んだものだ。

小学校の授業中であれば、みんなで校庭で遊びたいと担任にせがんだほどだ。今思うとやはり小学生だったんだなと実感できる。

だって、今は雪が降ってもそんなに嬉しくないし。むしろ、寒いし電車が遅延するしで災難ばかり。

「こう寒いと、やっぱ夕飯は温かいのが食いたいよな……」

家には現在親がいない。いないと言っても、別に天涯孤独とかではないし、病気や事故で他界してしまったわけでもない。ただ、仕事で両親共に短期で出張しているだけだ。

まあ隣は祖父母の家だから厳密には一人暮らしとは言えないんだが。

しかし、今日は友人たちとの食事会らしく本当の一人ぼっち。

一人だひやつほーいなんて最初は喜んでいたが、放課後になればそんな気持ちはいつの間にか消えていた。

「カップ麺なんて寂しいし、なんか作っか」

ああそういえば。

学園艦に行っていた友人たちが帰ってくるとか言ってたっけ。寄港するとかなんとか、メールが来ていたのを思い出した。

学園艦に行ってみたい気がしないでもないが、別に陸の学校も慣れればそう悪くない。

「となると、みんなでワイワイ食えるのがいいな。えくと……白菜と長ネギ、春菊……魚も入れてたいな。きのこはなし」

きのこ好きには申し訳ないが、俺はきのこは食えない。誰だって好き嫌いの一つや二つあるもんだらう。

それが俺はきのこだったという話。

「よし。こんなもんでいいだろ」

商店街で必要な材料は買った。後は帰って調理するだけだ。

夕飯は鍋。寒いときはこれに限る。

「たっだいまー」

なんて声を掛けても返事はゼロ。それも当然、この家の住人である両親がいないのだから……ないなら家で案外寂しい。

そんな我が家だが、返事はなくてもお出迎えはある。

「おっす、タロウ」

トコトコと歩いてくる我が家の飼い猫のタロウ。出迎えは嬉しいもんだが、少しぐらい鳴いて出迎えてくれてもいい気がするの俺だけだろうか？

母親の時なんかめっちゃ鳴いて出迎えてんのに、俺とか親父には鳴かないのはいかに。

「さっむ……部屋を暖めておくか」

「そうしてくれると助かる」

そんな声が背後から聞こえてきた。

この家には、訳あって俺以外の住民は現在存在しない。猫のタロウならいるが、アイツはにやーにやー鳴くだけで喋りはしない。喋れたらよかったのに。

よって、声を掛けてきたのは外からきた誰かということになる。俺の生活費を狙った泥棒……なら話し掛けてくるのはおかしい。泥棒なら泥棒らしく、静かに盗むのがセオリーのはずだ。

ならば、

「おっす。お久し」

「ああ、久しぶり」

「お久しぶりです、カズマさん」

我が幼馴染、西住姉妹だ。

戦車道の西住流師範の娘であり、戦車道の強豪校の黒森峰に通って

いる俗に言うお嬢様ってやつだ。家なんかめっちゃデカいし、戦車置いてあるし、使用人がいるし、なんちゃって金持ちとはわけが違う。「なんだみほ？ 昔はカズマーって呼び捨てにしてたのに、急にさん付けしちやって」

「あ、あはは……」

「別に気することはないんじゃないか？ みほも年頃ということだ」  
そういうものなのか。まあずっとヤンチャなままでいられないのは同意しておく。

みほは幼稚園や小学校の時はヤバかったからな。ヤンチャというか、わんぱくというか……。

「んじやまほもさん付けしろ」

「断る」

解せぬ。

「ここじゃなんだし、中に入れてくれ。部屋が寒いのは我慢の方向で。ストーブつけとくから暖かくなんだろ」

「すまないな。お邪魔する」

「お邪魔します……あ、タロウ！ タロウも久しぶり！」

やはり解せぬ。何故タロウは西住姉妹にゴロゴロと甘えるのか。やはり野郎はダメだというのか、スケベ猫め。

「カズマ、夕飯はどうする？ 外食というのも手だと私は思うが」

「この買い物の袋を見てそれを言うとかわざとだろ。事前に俺が作るってメールしといただろ」

「でも、本当にいいんですか？ 私たちは何もしないで」

「へーきへーき。タロウと遊んどいてくれ」

せっかくのおもてなしなのだ。たまには一人での料理も悪くない。これでも料理には少しばかり自信がある。母親に太鼓判を押されるぐらいには上手になったつもりだ。

見ている西住姉妹。昔の黒焦げ量産機だった俺とは違うということを見せつけてやる。

「それで、夕飯は何を作るんだ？」

「今日は寒いじゃん？ 温かいのがいいと思ってな」

雪が降る寒い冬。

作るといったらやはり、

「寄せ鍋だ」

案の定一人で作るのはやはり少しめんどくさかった。

変に意地を張らずに手伝ってもらえばよかったかな、なんて考えが脳裏をよぎったがもう過ぎた話。

「出来たぞー。お待ちぞーさん」

「ほう、本当に昔とは出来が違うな」

「うっせ」

「すごく美味しそう！ 昔のものとは比べ物になりませんね！」

何故にこう、この姉妹は昔の俺を馬鹿にしてくるのか。俺のガラスハートが砕けそうだぜ。

そりゃ、昔は焦がすのは当たり前、分量間違えにお皿のひっくり返しなんてザラであったが……うん、自分で思い返しても酷いな。

「んじゃ……」

「「いただきます」」

☆

案の定というか、なんというか。みんなで鍋をつつついていたらあつという間に空になってしまった。

その空になった鍋を西住姉妹は物足りなそうに見ている。やはり、戦車道なんてものをやっているコイツらからしたら、少食なんて有り得ないんだろうか？ 正直俺より食ってる気がする。

「お二人さん、物足りないか？」

「え、いやそんなことは……」

「むっ、そんな風に見えたか」

まあそんなことだろうと思って……これが本日のメダ。

「んじやまあ、雑炊でメますか。鍋といったらこれよ」

麺もいいが、飯はやはり欠かせない。

「どうよ？　なかなか上手くなってるだろ」

渾身のドヤ顔。赤の他人にやったらブチ切れ案件だろうが、まあコイツらなら平気だろ。

それぐらいの仲は築いてきたつもりだ。

「そう……だな。正直脱帽するレベルだ。まさかここまでとは思って  
もいなかった」

ふむ。

「美味しかったです！　是非またお願いしますね、カズマさん」

ふむふむ。

お粗末さまでした。



## 二話 カレーライス

「いらっしやいませー」

なんとかスマイルを浮かべながら接客をする俺。

高校に上がり、親の許可も貰ってようやくアルバイトが解禁された。学校によってはアルバイトが禁止されているところもあり私立とかは特に厳しい気がするが、俺の通っている高校は許可さえ取れば別にアルバイトしてもいいよーという感じの学校。

将来のため、欲しいもののため。俺は今日も店の歯車となって働く。

「いらっしやいませー。ご注文お決まりでしたらコチラでお伺いしまーす」

客は俺なんかのことは気にせず店内で自由にする。メニューを眺めては帰ったり、お持ち帰りで何かを買っていったり、中にはトイレを借りに駆け込んでくる客も。クーポンのチラシを持ったおばちゃんも昼間に大量発生している。希少種として「アレくれ」なんて言う猛者も来る。

接客する立場、なんとかあくびをかみ殺し、俺は時計を気にする。時計の針は確実に時を刻んで、短い針はもうそろそろ夜の8時を指さうとしている。

この時間ともなろうと、さすがに客足も減ってきて暇な時間帯へと突入する。まあそもそもこの店が8時で閉店なんだけど。

土日の昼間はピークの時間帯ということもありバカ混みだが、平日の夜なんて正直そんな来ない。来ても学生や仕事帰りのおっちゃんたち。

「いらっしやいませー、ご注文をどうぞー」

客をぎこちない笑みで迎える。耳をイヤホンで塞いでスマホを弄る客、財布の中を確認しておどおどする客、期間限定で今は取り扱っていない商品を注文して、ないことに逆ギレする神様。正直神様なら頼むから俺の願い事を叶えてほしい、2度と来るな。ハッシーセットを注文して、可愛いがま口の財布から小銭を出す小さくて可愛い女の子

の「ありがとう」に癒されて次のお客さんにだけ120%の笑顔を振りまく。

決してロリコンだからとかそういう理由ではない。相手が天使なだけ。純粹な子って癒される。

「店内で召し上がりでしょうか？ お持ち帰りですねかしこまりました」

お持ち帰りということで、ビニール袋を準備して紙袋に商品を詰めて客に商品をお渡しする。早く渡せば渡すだけ、客の表情は明るくなる。俺がバイトしてて楽しいのはこの時間をいかに短くするかだが、まあそんな簡単に早くなったら苦労しないよね。

常連ならみんな普通に気にしないし、早いことに越したことはないがたった数秒を気にするする人間は稀有だからだ。

そうやって、ほぼ無心で仕事をする事数十分、あと少しであたりという所まで時計の針が進んだ頃だった。

俺は持ち帰りの時間短縮するのが楽しいと言った、しかしそれ以上に楽しいのは美人ウオッチングだ。他のレジに入った美人、もしくは自分のレジに入ってきた客を品定めするように眺め回すのがまた密かな楽しみ。変な意味じゃないよ？

あの女の人、美人だなくただその友達はものすごい太ってるな、とか。

うわああの人がおっぱい大きいなって思ったら、隣に彼氏いるのかよ、とか。

なんだよあの露出高い服ありえねーだろ、やっぱ彼氏持ちか爆発しろ、とか。

いろんなことを思いながら、通り過ぎていく女の人を観察していく。稀に神がおまかせじゃなくてちゃんとキャラエディットしただろ、つてくらい美人やイケメンがやってくる。特に長身イケメンがやってくるたび、俺の心臓が一つずつ壊されていく。かれこれ二十個以上は心臓を消費したんじゃないか。

反面、美しい女性客がやってくると笑顔120%増し、声の可愛さメーター振り切り(当社比)で接客させてもらう。しかし悲しいかな、

やはりそういう美女はだいたい睡付きでスマートフォンの方この  
彼氏や2次元の旦那に夢中、俺なんかは目に留まらない。

誰か俺目当てに来てくれないだろうか。無理ですぞ知ってた。

「閉店時間になったら、今日はあがっていいぞ」

「あざっすなっす」

なんか日本語じゃなくなってきた、仲のいい店長だし許してけろ。  
まあ本日最後のお客さんだし120%の笑顔で接客しよう。スマイルは無料で提供するのがこの店のモットー。しかし、タダより高いものはないってばっっちゃが言ってた。

「いらっ……いらっしやいませ、こんばんは」

そう思っていた矢先だった。レジに飛び込んできていたお客さんはなんかめっちゃ見たことある顔。一瞬固まりかけたが、なんとか耐えた俺を誰か褒めて欲しい。いや、俺が褒めよう。良くやった、俺。

この時期は学園艦にいるはずと思っていたのに、なんで陸にいるんだよ。他人の空似か、はたはまた幻覚か。疲れているのかもしれない。

「なんだ、カズマジじゃないか。ここでバイトしているとは知らなかった」

俺はまほが陸にいるなんて知らなかったよ。

店内を見渡せば、まほ以外の客は見当たらないし店長は裏で洗物。

……まあ、今なら会話しても大丈夫か。

「……なんで陸に来てんの？ 退学にでもなったか？」

「そんなわけないだろ。学園艦が寄港する日だったただけだ。それで……」

「家に帰る途中で」

「そういうことだ」

そういえば寄港することもあるんだっけ。普段まほとかに会う時にタイミングなんて意識したことなかったから気づかなかった。

しかし、まさかバイトの日に寄港とは俺も運がない男らしい。知人にバイトしてるところを見られるのはなんか恥ずかしいというか、嫌

というか。

「てか、よくここに来たな。おばさん、ファーストフードとかに五月蠅  
そうな人なのに」

「今日はお母様は仕事でいない。菊代さんも用事があるとか」

「……その様子じゃ、親父さんもいないだろ」

「よく分かったな。今日は私とみほの二人きりだ」

この家族、忙しすぎではなからうか。せつかく娘二人が帰ってくる  
のに出迎えなしとは仕事の都合とはいえなんか寂しいものがある。

……娘二人？

「あれ、みほはどつたの？ 一緒じゃねーの？」

「中等部と高等部じゃ授業が終わる時間が違うんだ。みほなら先に  
帰っているはずだ」

「さいですか」

しばらく俺をじっと見つめていたまほは、何を思ったのか手をポン  
と叩き、

「そうだ、夕飯。カズマが夕飯作ってくれないか？」

いきなり何を言い出すのかこのおたんこなすは。

「んな無茶言うな。バイトはあと少しで終わるけどよ、そこから帰っ  
てお前ん家で料理はかったるいわ。第一、材料とかどうすんだよ」

「家にあるものを使えばいい」

なんて無茶を言うのだろうか、この戦車娘は。砲弾が頭にでも直撃  
しておかしくなったんじゃないやなからうか。

だからあれほど頭を出すなど言っていたのに。

「ダメか？」

「……分かった分かった、なんかあるもので適当に作るよ」

そんな目で見つめられたら断れんわ。その返事に満足したのか、ま  
ほは上機嫌そうに店の外で待っていると行って出ていった。

……あれ、注文は？

☆

「あく、マジ疲れた」

やっぱ働くって疲れる。明日がまだ休みだからいいが、次の日学校とかマジ死ぬる。

楽して稼げる仕事でもあればこんな苦労しないのだが、どうやら世の中そんなに甘くないらしい。

「お疲れ様。しかしまさかアルバイトをしているとは知らなかった。親に借金でもしたのか？」

「するか。欲しいもんがあるから頑張ってたよ」

「欲しい物とは？」

「それはもちろん……内緒グフツ!？」

呟いた瞬間にまほは俺の足を踏んできやがった！ 一応加減しているようで足が卵のようにゴシヤアって感じに潰れることはなかったが、それなりに痛い。思わず押していた自転車を放しそうになっただわ。

「足踏むなよ……欲しい物は買ってからの楽しみだ」

「……変なものは買うなよ？」

オカンか。

第一、変なものって何だし。わざわざエロ本とか買うのにバイトなんてしねーよ。いや、余ったらワンチャン……しようがないね、男の子だもん。

「そ、それより夕飯どうすつか。食材何あるか分からんが、一応リクエスト聞いとく」

「そうだな……カレーライス。カレーライス作ってくれないか？」

そういえば。昔からまほはあんまり何食べたいとか注文するタイプじゃなかったが、カレーライスだけは別だった。よくしほおばさんにカレー食いたいって頼んでたっけ。

まあそうと決まれば夕飯のメニューは決まりだ。せっかくだからお嬢様のご期待に応えましょう。

「よし、ならとつと帰るぞ。2ケツだ2ケツ」

せつかく自転車があるのに押しして帰るなんてもつたいない。まほは歩きだが、後ろに乗せて走れば大丈夫だろ。ノープロブレム、ゴーハウス。

「……大丈夫か？」

「……すまん、やっぱ無理」

まほを後に乗せたらフラフラし過ぎてめっちゃ怖かった。思わず重っ！って言いそうになったがなんとか堪えた。言っていたら今度は足を踏まれるだけでは済まなかっただろう。

……その後は普通に歩いて西住家に向かった。

「ただいま」

「おかえりお姉ちゃん！」

「お邪魔しまーす」

「あれ、こんばんはカズマさん。どうかしたんですか？」

「どうかしたんですよ。そこのお姉ちゃんに拉致されちゃってさ」

え、え、と混乱しているみほを置いてまほと二人スタコラと台所に向かう。

さて、肝心の食材は……

ふむ、この材料から作ることが出来る料理となると……もうアレしかないだろう。

まあ別に悪くない。寧ろ良い。

俺も好きだし、得意料理と言っても過言ではない。

小さい頃から練習しているアレは、日々の研究の成果により昔とは比べ物にならないぐらいに上手く作れる自信がある。

何せ俺の母親から太鼓判を貰えるまでに上手くなったのだ。不味いわけが無い。

まほも分かりきっていることではあるが、敢えて俺は言ってみた

「ああ。夕飯を作るのは構わないが——別に、カレーライスを作っても構わんのだろう？」

「ムダ話せずに作ってくれ」

「うい。まあ、せいぜい期待には応えるさ」

そう言いながらも、彼女の口元には隠そうとしても隠しきれない笑みが浮かんでいた。

俺は、昔からこんな時間が好きだった。

### 三話 ハンバーク

土曜日の昼ピーク。

それは店にとって最高の時間帯であり、ただの下っ端アルバイトには最悪の時間帯である。いや、この時間に儲けないと店が厳しいのは分かるけど、それでもやっぱりその時間に働きたくないと思うのは俺だけではないはず。

まあ今日俺はシフト入っていないんだけどね。たまには休ませておくり。

しかし悲しきかな、友人との遊びの予定はなし。別に友達がいなくてかハブられてるとかじゃなくて、純粹に今日は遊ぶつもりがなかった。

友達とゲーセンやらカラオケやら行くのもいいが、自分の時間を大切にするのもデキる男の条件だ。

……なんだが、

「ごめんねカズマちゃん。ちょっと急な用事が入っちゃったからうちのワンチャンよろしくね」

「アツハイ」

隣のおばちゃんに犬の世話を頼まれてしもうた。いや、犬は好きだからいいけどさ。

「タロウ、ジョイをあんましビビらせんなよ」

「ニヤー」

ニヤーと鳴いて返事してくれるのはいいが、ホントに分かってんのかねコイツは。ちなみにジョイは隣のワンチャンの名前。

よく家の中におばちゃんが連れてくるからタロウとジョイは初対面ではないのだが、何故か体が大きい方であるジョイが猫のタロウにビビりまくっているのだ。猫が苦手なのかしら。

別にジョイが来てもやることは変わらず。普通に一日を過ごす。本を読んだり、ゲームしたりダラダラしたり。合間に勉強をして過ごすのが学生の特権だ。



両親が家にいれば勉強しろだの小言を言われただろうが、いない今は自由の身。休みを存分に謳歌する。

「ジョイ、散歩行くぞー」

そうやって話しかけてもジョイは返事をしてくれない。動物が言葉を話せばな、なんてなんとなくもの悲しさを覚えながらも、俺の声を聴いて走って駆け寄ってくる二匹がとても愛らしく思う。てかなんでタロウも来たし。ネコは散歩しません。

ジョイにリードを見せてやると散歩に行くということが分かったからだろうか、その尻尾ははちきれんばかりにブンブンと振り回されている。

おばちゃんから借りた、空き地でジョイ遊ぶためのボール、糞を処理するためのスコップとごみ袋、帽子は……夏じゃないし、いらんか。

散歩に行く準備を完了してからリード掴んで家を出る。

「行ってきます」

俺の言葉に返事はなく、玄関でただ寂しそうにタロウがこちらを見つめていた。

\*

犬の散歩というのは普段やらないからそう実感しないが、意外と大変なものである。

犬という生き物は有り余った体力を発散しないと健康に良くない。柴犬のような中型犬の場合は一日に二回、一回の散歩の時間は最低30分が目安と言われている。大型犬であれば、逆にこちらが引きずられてしまうほどの速さで走るからそれはもう大変の一言。

俺なんかは老人と比べれば体力に余裕がある若者であるから犬の散歩を1〜2時間することなんて苦ではないが、年をとって来るとそうもいかないだろう。

それも毎日となると、やはり辛いこととなってくる。しかし、散歩は犬を飼った人が必ずやらなければならない必須事項だ。

よく自分の子供たちが親離れして寂しくなったからと言って犬を飼い始める老人たちがいる。それは結構なことだが、そのあたりのことも含めて『犬を飼う』ということをしつかり考えてほしいと思う。動物を飼うということは命を預かることであり、命はおもちゃではないということ。

聞いた話ではあるが、産まれたての子犬を捨て、その子犬はカラスに喰われて死んでしまったと。バカなんじゃなからうか？ 命を粗末にするなど。親もいない子犬が生きていけるわけねえだろ。

世の中にはこんな人たちであふれていると考えるとなんだか悲しくなってくる。果たしてこの国の未来は大丈夫なのだろうか。

と、関係のないことを考えると目標地点である空き地によく到着した。

なんとこの空き地は所有者がドッグランとして開放している土地であり、犬を連れ来た人たちが時折ここへ来て犬と遊んでいる。

そして、飼い犬がいるということは当然その飼い主が居るというわけで、飼い主の交流の場でもあつたりする。

「どうやら、今日は先客が一人いるようだ。」

「おつす、みほ」

「あ、こんにちはカズマさん！」

そこに先客としていたのは幼馴染である西住みほ。どうやら飼い犬と遊んでいた最中らしく、その手にはボールが握られていた。

ぐるりと周りを見渡しても他にこの空き地には人影がない。いつも散歩をする時は姉であるまほと二人でやっていると聞いたが、そのまほは何処にいるのだろうか？

「あれ、みほだけ？ お姉ちゃんはどしたの？」

「お姉ちゃんは多分まだ寝てると思う。気持ち良さそうに寝てたから、起こしちゃ悪いかなって……」

「へー、珍し」

まさかまほがお昼近くまで寝てるとは。やはり高校に上がったばかりだし、西住流の跡継ぎ娘ということで苦労しているんだろうなあ。

今は一年生ということであれだが、来年になればみほも高校に上がるし、多少は違ってくるのかもしれない。

「ま、たまにはゆっくり寝てもバチは当たらんのだろ」

「そうですね、お姉ちゃんいつも頑張ってるし……勝たなきゃいけないのに、私なんて……」

お、自虐モードか。

「ベシベシっ」

「あ痛っ!? なんで頭叩くんですか!?!」

「もつと自信持てって。戦車道のことはよく分らんが、みほだつて今はまほの跡を継いだ隊長だろ? 隊長が不安になると、周りも不安になるぞー」

「うっ、それエリカさんにも言われました……」

エリカ、さん……?

「あ、戦車道の仲間で今は副隊長をしている人なんです。気が強くて、リーダーシップがあつて」

「へー、みほの友達かー。どんな人かめっちゃ気になるわ」

「あとお姉ちゃんのこと大好きです」

……それはどういう意味での好きなんだろうか。Likeでの意味なのかLoveでの意味なのか。あんまり深く聞かない方がいいかもしれない。

そんな俺をよそに、ジョイはあちらの犬と無邪気にじゃれあつている。

あ、そういえば西住ワンチャンの名前って知らない。良く犬に食べ物の名前を付けている人が多いが、西住ワンチャンもそのパターンなのだろうか。

となると、まほの好きな食べ物といえば……カレーライス? いや

いや、犬の名前にカレーライスは無いわ。

「みほの好きな食べ物ってなんだっけ?」

「え、急にどうしたんですか?」

「いいからいいから」

「……マカロン、かなあ」

なるほど。こっちの方が全然ありえる。

となると、西住ワンちゃんはマカロンか。

「もしかして、マカロン作ってくれるんですか!？」

「ウエ!？」

いきなり目を輝かせて来たから、つい変な言語になってしまった。しかし、マカロン。マカロンかあ……

無理ですね。うん、無理。

「無理だわ」

「え、作ってくれるから好きな食べ物聞いたんじゃないんですか……？」

残念ならみほよ。その場合は好きな食べ物じゃなくて、好きな《料理》を聞くんだわ。

そもそも、マカロンなんて作ったことないし。

「すまんがマカロンは無理。せめて他の料理プリーズ」

「うう。そしたら……あつ、ハンバーグ！ そういえば、エリカさんがハンバーグ好きなの思い出したら食べたくなっちゃった」

となれば、昼のメニューは決まった。

\*

「む、何故カズマが家にいる」

「今度は妹に拉致されたからだよ」

昨日は姉、今日は妹。

拉致しすぎではなからうか、この姉妹は。別に俺は西住家専属コックじゃないぞ。

「……ハンバーグか」

「みほからのご注文でな。材料はないかもと思って家から持ってきた」

「なんか我儘言っただみたいですみません……」

「まあ、せっかくだ。これぐらい気にすんな」

相も変わらず食卓を囲むのは俺とまほとみほの三人。

テーブルの上に置かれたのは今日の昼食であるハンバーグだ。

「「いただきます」」

こんな休日も悪くない。

いや、むしろ良い。

「今度こそマカロン作ってくださいいね！」

「……今度な」

……マカロン、要練習だな。

## 四話 流しそうめん

「ええ……やだよ。めんどいし」

「ええー、いいじゃないですか。せっかくだし、やりましょうよ」

時は夏休み。それは我ら学生にとって最大かつ最高の休み。今日も今日とてそんな夏季休暇中の我々俺と西住姉妹は悠々自適な夏休みライフを過ごしていた。そんな素敵な時間を過ごしているからこそ、俺としてはみほの頼みを承諾したのは山々なんだけど、残念ながらすることはできない。

「やりませんか、流しそうめん」

いきなりどうしたというのか。本当にいきなり過ぎてわけがわからない。

そうめん……それはまだいい。夏に食べると美味しさは倍増だし、夏の暑さを軽減してくれる夏の逸品だ。

が、そのそうめんに枕詞で『流し』がつくととなると話は変わってくる。

流しそうめんとは、流れてくるそうめんを誰がいち早く手に入られるかという熾烈なバトル。奪うか奪われるかの仁義なき戦い……というのは真っ赤な嘘、とまでは言わないが大袈裟過ぎたか。

そんな冗談は置いといて、流しそうめんか……

「確かに楽しそうだけどよ……キツくね？」

「え、何がですか？」

「いや、何がって……色々。そもそもうちに流しそうめんが出来る道具なんて無いぞ」

そこが一番の問題だ。

流しそうめんに必要なのは勿論そうめんだが、それを流す為の道具も必要となってくる。なにせ流しそうめんなのだから。流さなければ流しそうめんなんて呼べなくなってしまう。

やるならやっても問題ない広い土地、そのための道具が必要不可欠となってくる。

だがあいにく、うちにはその両方とも無い。そんな広い庭はないし、道具も無い。これではやろうにもやる事が出来ない。

「ん、それなら問題無いぞ。うちの庭なら流しそうめんをやるだけの広さはあるし、道具も倉庫にあったはずだ。それを組み立てればやれなくはない」

「なんであるんだ……」

恐るべしお嬢様。俺んちに無いものを二つも持っているとは……

まあ戦車があるくらいなんだし、流しそうめんの道具くらいあるか……いや普通あるのか？

「はあ、まあいいや……よかつたなみほ。これで出来るぞ」

「うん、楽しみ！」

しかし、そうめんだけではちと物足りない気がする。となれば、アレしかあるまい。

確かまだうちにあったはず……

玉ねぎ

万能ねぎ

にんじん

釜揚げ桜えび

ホタテ貝柱

卵

うむ、問題なし。そうめんだけというのも悪くないが、せっかく料理が上手くなってきたんだし、こちら辺で何か作らねば俺の名が廃る。

☆

「ただいま戻りました」

「あ、どうも。お邪魔してます」

西住家の台所を借りてたところ、しほおばさんが帰宅してきた。なんか、めっちゃ久しぶりな気がする。それにこの人、夏休みなのに忙しそうだな……

「あら、久しぶりですねカズマさん。この暑さで天ぷら？ よくやりますわね」

「……俺もそー思います」

この暑さで天ぷら作りは中々に辛いものがある。油の熱さで顔が死ぬ。

まあそれでも。こういうのは料理の醍醐味かなって最近はどううになつてきた。作り終えた時の達成感はずっとくる。

「そういえば庭が騒がしいけど、あれは何？」

「あー、あれは流しそうめんの準備です。みんなでやろうかって話になつたんで」

「え、流すの？」

「ですよ。やっぱそう思いますよね。」

俺もしほおばさんと同じ感想になつたが、あの姉妹がやる気になつたらもう止められまい。

やはり大きくなつても、みほの行動力は凄いものがあるわ。

「……あまりはしやぎすぎないように」

「……気をつけます」

「お、カズマ。そうめん出来たか？ こちらは準備万端だ」

「ほいほい、出来てますよ」

「あ、かき揚げ！ カズマさん、かき揚げも作れるようになったんですか？」

「なんとかなー」

これでそうめんだけ持つてきていたら、まほに

「やはりカズマに料理は期待しすぎていたか。いや申し訳ない」

なんて挑発をされたに違いない。いや、この前実際にやられたけどさ。

カレーライスに隠し味とか付けないのか？ なんて聞かれたもんだから、隠し味は俺の愛情だーなんて冗談言ったらマジでドン引きしやがつて。それも姉妹揃つて。

……忘れよう。あれは悪夢だ。



☆

「それじゃ流すぞー」

「はい」

やっぱ流すのは俺ですよ。知ってた。

まあ、それでは第一投。そうめんを流せば、なんとまほがシユパツと取っていきやがった。てつきりみほに譲るかと思っただのに。

「ひつどおいお姉ちゃん！　こういう時は譲ってくれても良くない!？」

「甘いなみほ。これは……戦いだ……!」

何をやってるんじやこの姉妹。

「しかし、なんで急に流しそうめんなんて」

「ああ、それはな。カズマがやりたいって言ったのを思い出してな」

え、俺？

はてさて、この姉妹にいつやりたいつて言ったつげ。全く記憶にござらん。

「……いつ言ったつげ？」

「たしか、カズマさんがこれくらいの時」

「そうそう、たしか小学校低学年だった」

「あのなあ……」

みほが手で大きさを示したが、そんなちっちゃい頃かよ……

流石にそんな前のことは覚えてないわ。てか、よくこの姉妹は覚えていたな。

「それに約束していたからな、必ずやろうって。遅くなってしまったが、果たせてよかった」

「また三人でやりましょうね!」

……まったく、この姉妹にはかなわない。